

講演

チェンナイ(旧マドラス)・ハワイ・ベルファーストに見る舞踊教育

高知大学 大谷紀美子

どの文化をみても舞踊の存在しないところはないであろう。しかし、舞踊のあり方や伝承方法は文化によってさまざまに異なる。どのように異なっているかを、南インドの最大の都市であるチェンナイ(旧マドラス)にあるカラークシュートラ芸術学校及び米国ハワイ州ホノルルと連合王国北アイルランドの状況を比較し検討したい。本発表は学術的な研究を目的として調査した結果ではないので、一個人がそれぞれの地に数年間居住し体験したことを述べるにとどまる。また、資料の元となる経験も1960年代後半から1990年代前半と20年以上の幅があること、そして現在の状況はさらに変化している部分もあることを断っておきたい。

カラークシュートラ芸術学校は1930年代に舞踊家ルックミニ・デヴィによって設立された舞踊を中心とした私立の芸術学校であったが、彼女の死後、州立となり現在に至っている。そこでは、南インド古典舞踊と古典音楽の指導を行っており、卒業生は大学卒と同等にみなされ、小・中学校の舞踊科や音楽科の教師の資格を得ることができ、学校の先生として活動する卒業生がみられるし、プロの舞踊家となる者も多い。

中学校卒業が入学のための最低資格であるが、多くの生徒は高等学校卒業後入学しているようである。舞踊の実技が中心であり、修業年限は4年、その後さらにポストグラジュエイトとして2年の課程が設定されている。

私が在学した1960年代後半の生徒たちの入学動機は「ダンスが好きだから」というのがほとんどであり、舞踊を将来の職業と考えている者は少なかった。しかし、1980年代後半に行った聞き取り調査では、就職のためという男子生徒が増えていた。プロの舞踊家として活躍する何人かの女性に尋ねたが、入学時からそのような目的を持っていたわけではなく、多くは卒業後も踊り続けたいと思っていたので、気がついたら舞踊家になっていた、という返答が多かった。

授業科目は実技、理論、一般音楽、サンスクリット語、タミル語(タミル語地域以外からの入学対象)などである。その他中学卒の入学者には高等学校の一般教科が履修できるようになっていた。

実技に関して述べると、1年目は基本練習のみ、2年目の後半から作品が教えられ、卒業時にはバ

ラタナーティヤムのリサイタル2回が行えるくらいの数のレパトリーがシラバスとして準備されていた。ポストグラジュエイトの学生にはレパトリーを増やすことの他、下級生の実技授業の助手や学校主催の舞踊公演に出演するなど、卒業後に舞踊家や教師となる準備教育が行われる。

基礎教育は徹底しており、最初の1年半の間にカラークシュートラ・スタイルを身につけるようになっている。舞踊教師として就職率がよい理由は基礎教育の徹底にあるといわれている。少しスタイルの異なる舞踊学校でも、同校出身者を教師に迎えるところもみられた。

イギリスの学校制度を手本として出発したインドの教育全般であるが、カラークシュートラの舞踊教育方法はインドの人たちにはヨーロッパ的にそして欧米の人たちにはインド的だと思われる。

次にハワイの舞踊教育を考えてみたい。私は1975年から3年半ホノルルのハワイ大学音楽学科で民族舞踊学を専攻した。音楽科には民族舞踊学の実技科目として日本舞踊(西川流)、琉球舞踊(当時の真境名本流)、韓国舞踊、フィリピン舞踊、インドネシア・ジャワの舞踊とハワイのフラ(古典)が常時開講されていた。また、演劇学科にはバレエとモダンダンスが開講されていた。1980年代に民族舞踊学は演劇学科に移動された。現代様式のフラは体育学科で行われていた。大学出身者でプロの舞踊家になった者もあるが、ほとんどは大学の授業とは別に舞踊教習所で学んでいたようである。

フラの教習所はホノルル市内外に多数存在し、生徒たちがプロを志すか否かに関わらず、非常に盛況であった。ハワイ島で毎年行われる「メリー・モナク・フラ・フェスティバル」を目指して熱心に訓練に励む姿も多々見受けられた。

ベルファーストでは主としてカトリック教徒の子どもたちがアイリッシュ・ダンスに励んでいた。イギリスの大学には音楽や舞踊の実技を専門とする学科はほとんどないので、実技はもっぱら町の教習所的なところで学ばなければならない。私の滞在した1988年秋から94年末までの間にみられた変化はアイリッシュ・ダンスがより盛んになったことである。アイルランド人のアイデンティティーのより所として人気を得、教習所の数や公演回数の増加、そして舞台衣装が年々豪華になっていった。各種の催し物で行われるダンスの出演者はほとんど小・中学生であった。

それぞれの文化の中での舞踊のあり方や職業としての舞踊家の社会における位置が舞踊教育に大きく反映していると思われる。しかし舞踊家としてのプロ意識は訓練を重ねる上で育っていくという観点では多くの文化に共通するかもしれない。